

忠臣蔵の中国系人武林唯七について

関西日中平和友好会会長 見本重宏

二〇一四年六月十八日、一般財団法人神戸日華実業協会主催の講演会に、甲南大学胡金定教授をお招きして、「忠臣蔵の中国系人武林唯七」をテーマに講演会を開催しました。六十名ほど参加しました。関西日中平和友好会からは中島崇夫理事と見本重宏会長が講演会に出席しました。

胡金定教授はパワーポイントで講演原稿を作成し、新しく発見した資料を提示しながら、しっかりした根拠を例示して、明晰な口調でお話を進めました。非常に分かりやすく、いい勉強になりました。目に触れ耳にするものすべてが新鮮に感じました。

赤穂浪士四十七士の中に中国系人がいたと聞いた時、正直に申し上げると半信半疑でした。胡教授の念入りの調査と博識による研究で、「武林唯七は、忠臣蔵四十七士に加わり、吉良邸討ち入りの際には表門組に所属して、屋内突入の一人であり、台所脇の物小屋で炭俵に潜む吉良上野介を間十次郎光風が槍で突き、続いて武林唯七が刃傷事件で傷を負っている上野介の顔の傷を確認し、太刀で討ち果たして、亡君仇討の悲願を達成させました。この功績により、高輪泉岳寺での長矩の墓前の焼香順序も光風に続いて唯七が二番でした」内容を聞いて納得しました。非常に興味深い秘話でした。



武林唯七の祖父は、中国浙江省杭州市武林郡生まれの孟子六十一代末裔であり、孟二寛といわれています。文禄・慶長の役で、豊臣秀吉が朝鮮に出兵して、日本軍の捕虜となり、日本へ連行された後、毛利家に身柄を預けられ、その後には浅野家に医学を持って使えるようになった説、また、明の末期、内乱が続き、海外に流出した知識人などが多く、長門に漂流し、一時長門国に仕えた後、広島藩に仕えた漂流説があったようです。

故郷思いで、名前を出身地の武林に因み武林治庵と名のりしました。その後、日本人の奥さんを得て、息子や孫が出来て、浅野家本家と赤穂藩に仕え、赤穂藩士武林唯七は、二番目の孫に当たります。武林唯七は「喧嘩両成敗」という不文律の政道に反した赤穂藩取り潰しに異を唱え、吉良邸討ち入りを強く出張してメンバーに加わったのです。四十七士が各大名に預けられていた中、ただ一人下級武士唯七は、漢詩を残しています。その漢詩は次の通りです。

三十年来夢の中、
身を捨て、義を取れば、夢は尚同じく、
両親病に臥せ故郷にあり、
義を取り、恩を捨てれば夢は共に空なり

これも祖父が中国人である家系・孟子の末裔として見識の高さの証明の一つと思えます。

激動の時代、自分の考えをしっかりと持ち、何をなすべきかを明確に判断して実行することが、求められます。「忠臣蔵」の紹介をしてから、締め括りに日本人も大好きな歴史ロマン「三国

志」との比較も紹介してくれました。両作品の主演達の人生観・生活観・価値観などをも学習することができました。

当会(関西日中平和友好会)の設立に尽力した方々も、戦争終結後に中国人民解放軍に参加したり、中国に留用されたりした経緯も、人夫々の決断です。中でも、現在の日中両国民も殆ど知らない「日本隼戦闘隊の中国空軍設立協力」秘話と唯七の大きな違いは、「中国帰国者に対する就職差別や誹謗中傷の嵐」と「切腹による滅びの美学への賞賛」となって現われたような感じです。考えさせられた講演会でした。

日中関係の歴史の中で最悪な状況になっている今日こそ、一衣帯水の両国の溝を埋める為、相互理解の促進の見識と叡智が求められています。お互い日中交流の歴史に学び、日本人と中国人が手をしっかり握り、お互いに譲歩し合って、新しい平和の両国関係を築き上げることを想いながら、ふと気が付いたら、講演会が終了しました。



最後に、胡金定教授が武林唯七の家系は、現在でも東広島市西条でやきとり屋「くらのすけ」を経営していることを明らかにしてくれました。興味のある方は東広島方面に出かける際、一度立ち寄られたら如何でしょうか。

以上をもって胡金定教授の講演会報告とさせていただきます。

番外編

講演会に先立って、胡教授はご出身地の厦門語と日本語との関係や厦門文化と日本文化との相互影響関係について、ユーモアたっぷりと語ってくれました。厦門語をルーツとする日本語は次の幾つか紹介しておきましょう。

焼酎

サイコロ

らっきょう

海老

焼酎

布袋

ペーロン

餅

ソーメン

了解